

近代語形成期における漢語副用語の修飾機能

—— 漢語形容語を視野に入れて ——

趙 英 姫

【キーワード】 近代語 漢語副用語 漢語形容語 形態 修飾機能

1. 本稿の目的

漢語の副用語とされる語基には「案外な」「案外だ」の「案外」、「普通の」「普通だ」の「普通」のように副用語でありながら同時に助辞がついて連体用法や叙述（述語）用法になるものがある。一方、形容動詞の連用用法は副用語と同様文中で述語を修飾するはたらきをする。属性概念を表し、連体用法、連用用法、叙述用法などを持つ語を形容語と呼ぶとすれば、形容語には連体用法しか持たないもの、連体用法と叙述用法を持つが連用用法を持たないもの、連体、連用、叙述の各用法がそろっている、いわゆる形容動詞などがある。しかし、これらの修飾機能は同一ではない。本稿では漢語の副用語と形容語の修飾機能について述べ、特に副用語の形態に注目し、副用語の形態と修飾機能との関係について考察する。「部屋を丁寧に掃除する」と「部屋をきれいに掃除する」の「丁寧に」と「きれいに」は形態としては同じ形容動詞の連用用法であっても、「丁寧に」は「掃除する」動作の様態を修飾するものであり、「きれいに」のほうは結果の修飾であって、修飾機能に違いがある。一方、「堂々と歩く」の「堂々と」は形態は異なってもその修飾機能は「丁寧に」と変わらない。

本研究は、最終的に近代と現代の漢語副用語の比較を通じて近代漢語副用語の性格を明らかにするための中間報告的な性格のものであり、そのために明治の言文一致期以降明治末期までの近代語形成期を対象としている。最終目標が副用語と形容語の一般的な性質を究明するものであれば、現代語を対象に論じるのがもっとも理想的であるが、上記の理由によって近代語形成期を対象にしていることをことうわておく。

2. 用例の採集方針と採集量

明治の言文一致期以降明治末期までの小説、雑誌、教科書、啓蒙書から漢語の副用語と形容語の用例を採集し集計した。ただし、啓蒙書については言文一致期以前の俗文体のものを含む。用例をあげるときは通用の字体に直して示す。以下に用例を採集するときの基準を示す。

- ・一単位以上の字音形態素を含み、文中でダ・ナ・ノ・タルがついて属性概念を表し、連体、叙述成分になるもの、またはト・トシテ・ニ・ ϕ （助辞がつかないことを意味

する)、その他の助辞がついて副用語として使われるものを対象とする。

- ・次のように、連体修飾句のなかの叙述成分に相当する連体用法は叙述用法の例として採る。

人が大勢込合つてゐる中で、少しも人に先んじようとはせず、静かに自分の順番を待つてゐました。あれの温順なことをよく現して居ります。(『国定読本・第二期』1910) → 「温順だ」

- ・四単位以上の複合語の場合、最終結合に接辞性のものを含む「文学士流に」のような例は採るが、「○○+○○」型のは、語形の安定度を保証するために『三省堂国語辞典』に見出し語または小見出し語として出ている使用頻度の高いものだけを対象とした。

自由自在に 大同小異だ

- ・慣用的なものは含めない。

お大事にする 毎度ありがとうございます

- ・「なる」がつく例は叙述成分はダ、連体成分はナまたはノの用例として採った。

彼は猫中の大王とも云ふべき程の偉大なる体格を有して居る。(『吾輩は猫である』1905-06) → 「偉大な」

- ・形の上では連体修飾でも実際被修飾語を修飾限定するとはみられない、以下のような例は叙述用法の例として認めた。被修飾語が「ものだ」「わけだ」「次第だ」「様だ」などの場合、こういう例が多い。

「(省略) ……全体マア何の用が有つて二階へお出でだ、エ、何の用が有つてだエ」ト逆上あがつて極め付けても、此方は一向平気なもので、「何にも用は有りやアしないけれども……」(『浮雲』1887-89) → 「平気だ」

- ・次のように否定・受身などを含むものも一般の連体修飾用法に含める。

建物に関する規定も、やはり工場の性質に顧みて、危険ならざる範囲で、従来の工場に修繕を加へしめ、将来は一定の制限に従つて、新築する様にとすることと聞けば、是れも左程困難なる問題ではない。(『太陽』1901.3) → 「危険な」

- ・「形容動詞の連用用法+スル・ナル」の例も用例に含める。

ハイ、アノホツプスと申す人はセデーが生れた時から御存じで、大層深切にして呉れるので、セデーもよく懐いて居り升。(『小公子』1890-91) → 「深切に」

以下に、データの集計結果を示す。表1には、全体の語数および語基数を示した。表2は、それを分野別に示したものである。

表1 採集用例数(全体)

延べ語数	11058
異なり語数	2106
語基数	1403

表2 採集用例数(分野別)

	小説	雑誌	啓蒙書	教科書
延べ語数	6303	2830	1088	837
異なり語数	1410	896	358	197
語基数	990	671	281	148

語基数とは、複数の助辞がつく語基を一つに数えたときの数である。例えば、「一生懸命だ」「一生懸命な」「一生懸命」「一生懸命に」「一生懸命と」は異なり語数では5であるが、語基数では「一生懸命」1として数えられる。副用語または形容語になる漢語語基は1403種あるという結果が得られた。ジャンル別では、採集用例数が半数以上を占める小説で異なり語数・語基数も多くなっている。

3. 語基の分類

表3はデータに出現した形容語の語基を用法と助辞によって分類したものであり、表4は副用語の語基を形態と助辞によって分類したものである。

表3 漢語形容語語基の用法と助辞による分類

用法	助辞	例	語基数
連体用法	ノ	一介 不治	21
連体・叙述用法	ダ・ノ	遺憾 無用	138
連体・連用・叙述用法	ダ・ナ	嚴重 上手	741
計			900

表4 漢語副用語語基の形態と助辞による分類

形態	助辞	例	語基数
φ型	ノ・φ	一応 折角	48
	ダ・ナ・φ	案外 十分	14
	ガ・ラ・φ	是非 事実	205
	φ	結局 全然	52
二型	ニ	一概 一斉	27
ト型・トシテ型	ト・トシテ・タル	公然 堂々	145
その他	その他の形式	決して 要するに	12
計			503

表3と表4の助辞による分類の大体は野村雅昭(1998)によるものである。野村もふれているように、語基によっては助辞のつき方にゆれがあつて分類に迷うものがある。例えば、語基「意外」は「意外な」「意外の」の両方の使い方があつるが、この場合は「意外の」のほうが用例数が多いのでダ・ノ類に入れた。1403の語基のうち形容語の語基は900、副用語の語基は503で、形容語の語基のほうが種類が多い。

形容語の語基はノしかつかないもの、ダ・ノがつくもの、ダ・ナがつくもの(いわゆる形容動詞)に分けられる。形容語語基の大半はダ・ナ類に属するものである。野村によるとダ・ナ類はさらにその品詞性によって、「曖昧」「確実」のような相言類の品詞性だけのものと、「危険」「元気」のような体言類と相言類の品詞性を同時に有するもの、「失敬」

「心配」のような体言類と相言類、用言類の品詞性を同時に有するものに分けられるが、ここではその詳細は述べない。ト・トシテ・タル類のタルの連体用法は現代語ではほとんど消滅しており、この時代にもト・トシテがつく使われ方が優勢であるため、副用語として分類した。「颯と」「雑と」「続々と」「篤と」「二度と」などはタリ活用ではないが形態上ここに含めたものである。φ型は、助辞のつき方によって以下に分けられる。

・φ……ほかの品詞性を有せず、助辞がつかない形で副用語となる。

一々 一段 一向 一旦 皆目 結局 極 直 悉皆 精々
 全然 大分 丁度 到底 到頭 畢竟 毛頭 楽々

・ノ・φ……ノの連体用法があり、助辞がつかない形で副用語となる。

一応 一時 一層 見物中 早速 至急 折角 絶対 大概
 大抵 通常 突然 病中 不断 普通 別段

・ガ・ヲ・φ……体言類の品詞性を有し、助辞がつかない形で副用語となる。

一番 一生 去年 改革後 経済上 最初 事実 将来 数回
 世界中 是非 全体 当時 半分 目下 翌日

・ダ・ナ・φ……相言類の品詞性を有し、助辞がつかない形で副用語となる。

案外 仰山 結構 散々 自然 十分 随分 存外 存分
 大層 大変 特別 内々 余計

φ型のなかでもっとも多いのはガ・ヲ・φ類である。ここには「事実」「将来」のように、明らかにガ・ヲがつくもののほかにガ・ヲはつきにくい、その意味から体言類に属すると判断されるものも含まれる。例えば「改革後」「経済上」のようなものである。

二型の副用語は、ほかの助辞がつかずもっぱらニがついて副用語として使われるものである。φ型のなかにもニを伴う用法を持つものもあるが、この二型は助辞がつかない形では用いられにくいものをいう。

4. 副用語と形容語の修飾機能

4.1 ノ類

ノ類はほかの助辞がつくことなく、ノがついて連体用法となり、もっぱら属性概念を表す。

一介 久遠 焦眉 絶類 否運 不朽 不治 無辜 無二

ノ類には、修飾対象となる語の意味的カテゴリーが限られていて、慣用的な使い方をす

[1] こつちは一介の書生、向ふは大先生であるから…… (『太陽』1901.1)

[2] 今迄自分の無二の親友であつた派手な贅沢なさうして平凡な「東京」と云ふ奴を、置いてき堀にして、静かに其の騒擾を傍観しながら、(『秘密』1911)

4.2 ダ・ノ類

ダ・ノ類には、まれにナを伴うものもあるが、連体用法としては主にノがつく。また「意外に」「一緒に」のように連用用法を持つものもあるが、一般に連用用法を持たない

ものが多い。

意外	遺憾	過分	肝心	最大	正真	单独	適宜	同一	同様
必然	別々	未見	無限	無名	無用	無類	唯一		

ダ・ノ類の連体修飾用法は、同じ連体修飾でもダ・ナ類の連体修飾とは性質が異なる。ダ・ナ類の連体修飾は修飾対象である名詞に内在している性質を修飾する。

[3] 二十の時、始めて人に誘はれて芸者を揚げましたが、綺麗な女がずらりと眼の前に並んで、平生憧れてゐたお座付の三味線を引き出すと、彼は杯を手にしながら、感極まつて、涙を眼に一杯溜めてゐました。(『幫間』1911)

「綺麗な」は、「女」に内在している性質の一面を修飾することによって「女」の概念をより具体化している。ところが、ダ・ノ類の連体修飾は修飾対象に内在する性質を修飾するのではなく、対象の外側から修飾する。

[4] 然るに今我国に於て殖林事業を盛大にし、木材枕木を支那の大市場に輸出するに於ては、これ頗る我国の利益にして、意外の財源を斯の方面に於て獲得することが出来ます。(『太陽』1901.5)

「意外の」は「財源」という概念の性質を修飾しているのではない。「意外の」は「財源」に対する話者側の判断を示していて、「財源」の外側から修飾している。以下に類似の例をあげる。

[5] 『夫は遺憾の話じゃ、何処から刺客が来るか』(『太陽』1901.1)

[6] 「さうともネさうともネ、幾程母親さんの機に入ったからつて肝腎のお前さんの機に入らなきやア不熟の基だ。(省略)」(『浮雲』1887-89)

4.3 ダ・ナ類

ダ・ナ類の連体修飾は上に述べたように修飾対象に内在する性質を修飾するものが本来の用法であった。ここでは、ダ・ナ類の連用用法について述べることにする。ダ・ナ類の連用用法の多くはそれ自身属性概念を表しながら動作が行われる際の様子を修飾する。

[7] 学校 の せんせい は、たいそー、しんせつな 人 で、ていねいに、せいと を をしへます。(『国定読本・第一期』1904)

[8] 「そりや無論さ。あんなものの娘を誰が貰ふものか。寒月君もらつちやいかんよ」と大變熱心に主張する。(『吾輩は猫である』1905-06)

仁田義雄(1983)によると、動作の様子を修飾する副用語は修飾の性質によって様態の副用語と結果の副用語に分けられる。

[9] メレの案内に連れて通ふつた座敷を見、批評的に眺め升たが、質素にしつらつである中にも案外小ざつぱりとして住み好きさうでした。(『小公子』1890-91)

[10] 信一が空嘯いて威張つて居る処へ、今度はすうツと徐かに襖が明いて、光子が綺麗に顔を洗つて戻つて来た。(『少年』1911)

例[7]と[8]の「ていねいに」と「熱心に」は「おしえる」「主張する」動作そのものの性質を修飾する様態の副用語であるが、例[9]と[10]の「質素に」「綺麗に」は動作が行われたあとの動作の主体、または対象の状態を示すことによって結果的に「し

つらう」と「顔を洗う」動作を修飾する結果の副用語である。しかし、様態の副用語でも結果の副用語でも述語が表す内容の様子を修飾する点では修飾機能は同じである。ダ・ナ類のほとんどは動作の様子を修飾するものであるが、次の例の「感心」のようにことからの内容に対する話者の注釈を表す例外的な用法もある。

[11] 小供は感心に休まないで幼稚園へかよふ。(『吾輩は猫である』1905-06)

4.4 ト型・トシテ型

ト型とトシテ型の副用語のほとんどは動作が行われる際の様子を感覚的に描写するもので、擬音語・擬態語的なものである。実際、金田一春彦(1978)では中国由来の擬音語と擬態語としてタリ活用の語があげられている。採集例には、以下のようなものがある。

[12] 天地寥廓、而も足もとはは凄じい響をして白煙濛々と立騰り真直ぐに空を衝き急に折れて高嶽を掠め天の一方に消えて了う。(『忘れぬ人々』1901)

[13] すると其の時、さびれた町の静ずかさを破つて、霊台の下を過ぎる孔子の車の玉鑿が珊珊と鳴つた。(『麒麟』1911)

「濛々と」は白煙が立ち上るときの様子を目の前にみるかのように視覚的に描写しており、「珊珊」とは実際の音を示すことによって「玉鑿が鳴る」様子を聴覚的に描写している。

ところで、ト型とトシテ型の副用語のほとんどは上記の例 [12] と [13] および以下の [14] のように、様態の副用語として機能するものである。

[14] 此布団は疑ひもなく鈴木君の為に敷かれたものである。自分の為に敷かれた布団の上に自分が乗らぬ先から、断りもなく妙な動物が平坦と蹲踞して居る。(『吾輩は猫である』1905-06)

ただし、例外的に [15] の「秩然と」のような結果の副用語もある。

[15] 其外座敷一杯に敷詰めた毛団衣紋竹に釣るした袷衣柱の釘に懸けた手拭いづれを見ても皆年数物その証拠には手擦れてゐて古色蒼然たり、だが自ら秩然と取旁付てゐる。(『浮雲』1887-89)

鈴木泰(1980)は擬音語・擬態語の情態副詞は動作の進行する様子を修飾する「過程の修飾」をつくりやすく、形容(動)詞は動作が終了したところに出現した状態を表す「結果の修飾」をつくりやすいと指摘し、さらにその理由については国立国語研究所(1972)を引用し、形容(動)詞は本来「ものの静的な属性を表す」語であるからであり、「過程の修飾」をつくりやすい擬音語・擬態語の情態副詞は「ことの属性」を表すからであると述べている。動作の様子を修飾する点でト型・トシテ型とダ・ナ類の連用用法は修飾機能が同じであるが、ト型・トシテ型のほとんどは「過程の修飾」、つまり様態の副用語であり、結果の副用語にはならないという違いがある。

4.5 ニ型の副用語

ニ型の副用語は、動作の様子を修飾するものと、そうでないものに分けられる。以下のものは動作の様子を修飾するものの例である。

暗に 一度に 一心に 一斉に 一散に じかに 次第次第に

次第に 縦横に 徐々に 同時に 頓に 無性に 無二無三に
 動作の様子を修飾する二型のうち「一度に」「一齐に」「一散に」「次第次第に」「次第に」「同時に」「頓に」などは、動作の行われる際の時間的経過の様子を修飾するものである。二型には、特に [16] [17] のように、この種の副用語が多く含まれているのが特徴である。

[16] 母の手前兄夫婦の手前、泣くまいとこらへて漸くこらへてゐた僕は、自分の蚊帳へ這入り蒲団に倒れると、もう溜まらなく一度にこみ上げてくる。(『野菊の墓』1906)

[17] 其頃まで蘭学といふ者は、医家の専有物と云ふて宜しい位であつたが外国が交易を求むるやうに成つた頃からは之を修めやうといふ人が医者以外に次第に増加した。(『太陽』1901.2)

「一度に」はこらえていた涙が一举にこみあげてくる様子を、「次第に」は「増加する」動作が時間的に緩慢に行われたことを表す。

動作の様子を修飾するもの以外には「一概に」「現に」「実に」「単に」「特に」などがあるが、このうち「実に」は述語の属性の程度を修飾する、程度の副用語で、「一概に」「現に」「単に」「特に」は陳述の副用語である。

[18] 殊に女子には自然具はれる温厚柔順な美德があつてその美德を包み且つ其美を發揮させやうとする衣服なるものは余程思考を要すべき重大なものであるから、単に衛生とか質素とかいふもの、みを以て一概に推し付けるべきものでは無からうと思ひます。(『太陽』1901.4)

4.6 φ型の副用語

φ型の副用語は修飾機能によって動作の様子を修飾するものと動作が行われる際の外部の状況を示すもの、ことがらの内容に対する話者の陳述を示すものに分けられ、さらにこまかく分類される。

・動作の様子を修飾するφ型の副用語

〈程度〉	一段	一番	一層	結構	極	極々	至極	十分
	少々	随分	大層	大分	大変	多少		
〈頻度〉	往々	再三	再三再四	始終	常不断	数回	昼夜	
	日夜	二六時中	毎回	毎度	毎々	屢次		
〈量〉	一杯	悉皆	数軒	数人	数歩	大概	大抵	沢山
	多人数	半分						
〈その他〉	一々	一応	偶然	早速	生来	突然		

・状況を示すφ型の副用語

〈時間〉	以後	以来	改革後	去年	現在	午前中	今後	
	今日	暫時	従来	将来	先日	当時	年々	普段
〈場所〉	海上	家内中	帰途	三方四方	四面	城中	世界中	
	船中	東京中	日本中	万国中	方々	満山		

〈その他〉 概略 御一身上 経済上 親類中 法律上

・陳述を示すφ型の副用語

案内	一向	一体	事実	実際	是非	絶対	全体
存外	第一	多分	当然	到底	普通	無論	毛頭

φ型の副用語は、ダ・ナ類の連用用法およびト型・トシテ型、ニ型の一部と同様に、動作の様子を修飾するものもあるが、状況を示すものと陳述を示すものが多いのが特徴である。また、同じ動作の样子の修飾でもφ型は主に程度・頻度・量の面で動作の様子を修飾する特徴がみられる。状況を示す副用語の時間の概念は、ニ型の時間的経過の様子を修飾するものとは異なるものである。状況を示す時間の概念とは動作が成立するのが過去、現在、未来の時間の連続線上のどの時点であるのか、またはその動作が成立する時間的長さを提示するもので、これは述語に内在する属性とは無縁のものであり、述語の外側に存在するものである。しかし、ニ型の時間的経過の様子を修飾する副用語は述語に内在する属性の一面を修飾するもので、動作とひとまとまりの概念として認識される。

例えば、以下の[19]の「一生安楽に過せる」の「安楽に」は「過す」動作の様子を修飾する副用語で、時間の副用語である「一生」は動作の様子を修飾も含めた「安楽に過せる」動作全体が成立する時間の長さを示す。

[19]「(省略) 這麼家業を為んでは生活が出来んのではなし、阿父さん阿母さん二人なら、一生安楽に過せるほどの資産は既に有るのでせう、それに何を苦んで人には怨まれ、世間からは指弾をされて、無理な財を拵へんければならんのですか。(省略)」(『金色夜叉』1897-1902)

状況を示す副用語のその他に分類した「御一身上」「経済上」「親類中」「法律上」は、動作が成立する抽象的範囲を示すもので、具体概念である場所の概念を抽象化したものとも考えられる。

[20]「(省略) まァ此広い羅馬の中でも己の妻となるべきものは多分あの外に有るまいが、それにしても己は貴族だろう、貴族だから平民とは法律上婚礼することが出来ないでは無いか。」(『籠の俘囚』1888)

陳述の副用語は、以下の[21][22]のように、ことがらの内容に対する話者の注釈・態度を示すものである。

[21] 侯爵は眉を顰められました、兎に角其写真を見るのは嫌に思はれましたが、我知ずチラリと見ると、イヤ、案内奇麗で若々した顔が、そこから覗いて居て、其顔がまた、自分の側に居る子供に、余り生写しの様に似て居たので、(『小公子』1890-91)

[22] 足もとに臥て居た犬が耳を立て、きつと其方を見詰めた。それぎりで有つた。多分栗が落ちたのであらう、武蔵野には栗樹も随分多いから。(『武蔵野』1901)

5. 副用語の形態と修飾機能との関係

ここまで副用語の修飾機能を、動作の様子を修飾するもの、状況を示すもの、陳述を示

すものの三つに分けて論じてきたが、この分類の考え方は国立国語研究所『話しことばの文型(2)』(1963)にすでに示されている。同書では、文節相当のものを基本単位として、文の成分を「述語」「主語」「連用修飾語—(a)目的語(b)補語(c)連用語(d)状況語」「陳述的成分」「独立語」「句の扱い」に分けている。「連用修飾語」のうちの(c)連用語(d)状況語と「陳述的成分」の概念がこれまで述べてきた三つの分類の概念に該当するものである。同書では以下のように定義している。

連用語(R)は、述語（あるいは述語にかかる主語・目的語・補語とのくみあわせ）の表わすことからの性質・ようす・程度など、属性を一層くわしく示す成分である。

(国立国語研究所(1963) p. 75)

状況語(J)は、述語（あるいは述語にかかる主語・目的語・補語・連用語とのくみあわせ）の表わすことからのとりまく外的な状況（時間・空間・原因・理由・条件……）を示す成分である。
(同上 p. 75)

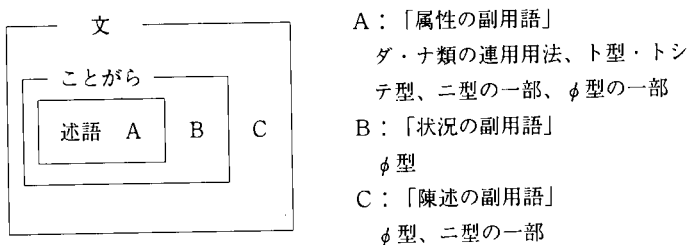
(4)陳述的成分(略号T)

この成分は何らかの点で、もっぱらその文の陳述的な面に関係するものである。

(同上 p. 80)

この分類では、対象は副用語だけに限らず、連用語のなかには「ナランデ 歩ク」の「ナランデ」のようなものや従属句も含まれているが、分類の基本概念は今まで述べてきたように漢語副用語の分類にも十分適用できるものと考えられる。以下、この分類を参考にして、これまで様子を修飾する副用語、状況を示す副用語、陳述を示す副用語と分類してきたものを、属性の副用語、状況の副用語、陳述の副用語と呼ぶことにする。以下は副用語の形態と修飾機能の関係について図にまとめたものである。

図 漢語副用語の形態と修飾機能との関係(ダ・ナ類の連用用法も含む)



本来中国語である漢語(和製漢語も含め)が和語の助辞を伴い日本語の文の成分としての資格を持つとしたら、その助辞には構文的機能が託され、助辞つまり形態によって構文的機能が異なってくると考えられる。図に示すように、ダ・ナ類の連用用法とト型・トシテ型、二型の一部は述語の属性を修飾するものである。ϕ型の一部もこれに属するものがあるが、上記の類とは違って主に述語の属性の程度・頻度・量を修飾する点に特徴があ

る。そして、述語の外側から修飾する状況の副用語、陳述の副用語は、二型の一部を除いては ϕ 型である。二型の多くは属性の副用語であるが、一部には陳述の副用語もあり、述語の内側の修飾と述語の外側の修飾にまたがるものとして位置付けられる。

6. おわりに

以上、明治の言文一致期以降明治末期までの漢語の副用語と形容語の修飾機能、および、修飾機能と形態との関係について考察した。今後、現代語との比較を通じて近代の漢語副用語の修飾機能の変遷などについて考察していきたい。

〈資料〉

【小説】

伊藤左千夫『野菊の墓』（1906）尾崎紅葉『金色夜叉』（1897-1902、会話文だけを対象とした）。国木田独步『武蔵野』のうち『河霧』『鹿狩』『まぼろし』『武蔵野』『忘れぬ人々』の5作品（1901）谷崎潤一郎『刺青』のうち『麒麟』『刺青』『少年』『秘密』『幫間』の5作品（1911）夏目漱石『坊っちゃん』（1906）夏目漱石『吾輩は猫である上編』（1905-06）二葉亭四迷『浮雲』（1887-89）山田美妙『夏木立』のうち『籠の俘囚』『玉屋の塵』『花の茨、茨の花』『柿山伏』『仇を恩』『武蔵野』の全作品（1888）若松賤子訳『小公子』（1890-91）＊『浮雲第三篇』は早稲田大学図書館所蔵のマイクロフィッシュ、『小公子』は複製版『女学雑誌』227-278号を使用し、ほかは近代文学館の複製版を使用した。

【雑誌】

国立国語研究所で試験公開中の「太陽コーパス ver6.0（1901年）」の口語体の記事。

【教科書】

国立国語研究所の『国定読本用語総覧』のうち第一期（1904年より使用）と第二期（1910年より使用）。

【啓蒙書】

加藤弘蔵『交易問答』（1869、初出による）加藤弘之『真政大意』（1870、初出による）福沢諭吉『学問ノス、メ』（1872-74、進藤咲子編、『学問ノス、メ本文と索引』、1992、笠間書院）。福沢諭吉『訓蒙窮理図解』（1868、『福沢全集第二巻』、1926、時事新報社）

〈文献〉

北原保雄（1975）「修飾成分の種類」『国語学』103、18-34

金田一春彦（1978）『擬音語・擬態語辞典』、3-25、角川書店

国立国語研究所（1963）「話しことばの文型（2）独話資料による研究」

（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』（西尾寅弥担当）秀英出版

鈴木 泰（1980）「情態副詞の性質についての小見」『山形大学紀要（人文学部）』9-3、45-79

趙 英姫（2001）「近代語形成期における漢語副詞の出現形態と使用場面との関連性」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第46輯第3分冊、53-62

（2002）「近代漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性」『早稲田日本語研究』10、87-98

中右 実（1980）「文副詞の比較」『日英比較講座第2巻 文法』、159-219、国廣哲彌編、大修館書店

仁田義雄（1983）「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10、18-29

- 野村雅昭 (1998) 「現代漢語の品詞性」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』,
1197-1213, 汲古書院
- 原田登美 (1982) 「否定との関係による副詞の四分類」『国語学』128, 122-138
- 前田富祺 (1983) 「漢語副詞の種々相」『副用語の研究』, 360-378, 渡辺実編, 明治書院
- (1983) 「漢語副詞の変遷」『国語語彙史の研究』4, 189-231, 国語語彙史研究会編, 和泉
書院
- 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』, 宝文館
- 渡辺 実 (1971) 『国語構文論』, 塙書房

《辞書類》

- 見坊豪紀他編 (2001) 『三省堂国語辞典第五版』, 三省堂
- 山田俊雄他編 (1995) 『新潮国語辞典第二版』, 新潮社